

[12] 日向市小体連

(学校数13校 児童数 3047人)

I 年間事業

実施日	事業名	主な内容	会場
4月30日(火)	市小体連第1回理事会	役員選出・年間計画	市教育研究所
7月5日(金)	市小体連第1回役員会	日向市陸上大会について 研究の進め方について	財光寺小学校
7月22日(月)	市小体連第2回理事会	日向市陸上大会について 研究の進め方について	市教育研究所
8月30日(月) 【9月13日(金)に延期】	市小体連第3回理事会	日向市陸上大会について 研究について(指導案検討)	市教育研究所
10月11日(金)	市小体連第2回役員会	研究について(指導案検討)	財光寺小学校
11月1日(金)	市小体連第4回理事会	日向市陸上大会について 研究(指導案最終確認)	市教育研究所
11月7日(木)	市小体連第5回理事会	前日準備	大王谷陸上競技場
11月8日(金)	第52回 日向市小学校 陸上大会	運営・準備等	大王谷陸上競技場
11月25日(月)	市小体連第6回理事会	研究授業参観・事後検討	細島小学校
2月【未定】	市小体連第7回理事会	来年度について	市教育研究所

II 事業部のあゆみ

1 陸上大会

- (1) 大会名 令和6年度日向市小学校陸上大会
- (2) 実施日 令和6年11月8日(金)
- (3) 会場 大王谷陸上競技場
- (4) 出場者 日向市内小学校6年生全児童(小規模校は5年生児童含む)
- (5) 実施種目
○ 走り高跳び ○ 走り幅跳び ○ 50mハードル走
○ 短距離走(100m) ○ リレー(100m×4名)
○ 長距離走(男子1000m、女子800m) ○ ソフトボール投げ
- (6) 競技方法
 - ・ 選抜での出場はリレーを除き、1人1種目とする。
 - ・ 「走」競技は、スタンディングスタートとする。
 - ・ 「走り高跳び」については、ベリーロールや背面跳び等危険を伴う跳び方は行わない。
 - ・ 靴は、普段体育で使用する運動靴とする。
 - ・ その他細部については、日向市小学校体育連盟による競技規則を適用する。
- (7) 反省

今年度は5年ぶりとなる開催になった。大会ではどの学校も応援等で活気があり、日向市の小学校が一丸となって取り組む様子が見られた。競技に取り組む児童も一生懸命な様子だった。しかし、運営をするにあたり課題も見つかった。プログラムの順番や召集のタイミング、計画・準備の在り方など次年度に向けて改善する必要があることがわかった。現在、働か方改革が進む中、陸上教室を存続させるかどうか協議が必要だが、児童にとって大きな成長の機会を存続させつつ、職員の負担も考慮し、この大会がよりよい機会になるように改善する必要がある。

Ⅲ 研究部のあゆみ

1 研究主題・副題

運動に親しみ、自主的・主体的に学びに向かい、課題を解決しようとする児童の育成
～言語活動や情報活用の充実を図ったボール運動系ネット型の授業実践を通して～

2 主題設定の理由

日向市小体連では、運動に親しみ、自主的・主体的に学びに向かい、課題を解決しようとする児童の育成に向けて、日々の授業の中でどのような取組みや工夫を行えばよいかという視点で研究をしてきた。本県では令和5～7年度に「ボール運動系ネット型」及び「球技ネット型」の領域において研究を深めていることになって、本市においても「ボール運動系ネット型」の領域であるソフトバレーボールを研究の題材に設定した。

また、本市では、今年度より2年間、ボール運動系の中でも、ネット型の学習に視点を当てて、言語活動や情報活用の充実を図ることで、運動における難しさや恐怖心を低減させ、運動する楽しさや目標を達成できた時の喜びを味わわせることを目指すことが、運動に親しみ、自主的・主体的に学びに向かう児童の育成に繋がっていくと考え、本主題を設定した。

3 研究仮説

児童の実態を把握し、運動能力や発達段階に合わせながら、言語活動やICTの活用を加えることで楽しいと感じ、主体的に学習に取り組むことができるのではないかと。

4 研究内容

1 指導方法の工夫・改善

- 児童の実態や能力に応じた場の設定・教材の選定
- ICT機器による、視覚的な情報の活用

2 技能向上を図るための手立てと工夫

- 毎時間の本単元の動きにつながるウォーミングアップの実施

5 研究の実際

(1) 指導方法の工夫・改善について

主体的・自主的に学びに向かうためには、まず子ども自身が、運動の特性を理解し、取り組めること、また思考力・判断力・表現力



【写真①】

(児童同士の動きを見て思考する場面)



【写真②】

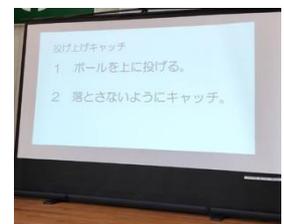
等を働かせながら課題を解決していくことが大切である。そこで、今年度から日向市では、ボール運動系ネット型の内容に視点を当て、児童の抵抗感や苦手意識を克服するための活動の工夫による授業改善を行った。中学年における「キャッチバレーボール」を題材として扱い、運動能力が高くない、運動が苦手な児童に対して自主的に運動に参加できるよう単元の学習の中で必ず行う帯活動を行い、苦手意識や難しい動きへの抵抗感を減らすための学習計画を立てた。初めは難しいと感じていた児童も授業を重ねるごとに技能が向上し、ゲームに必要な「投げる」、「キャッチする」などの技能が向上した。また、毎時間行うことにより、児童自身が技能の向上を感じることができ、ルーティーン化することで学習の中で児童が活動の理解にかかる時間を減らし、時間を効率よく活用することができ、運動量や話し合う時間の確保にもつながった。

(2) 技能向上を図るための手立てと工夫について

運動のポイントや活動の場所、運動の行い方などを口頭ではなく、視覚的な情報を用いることで効果的な学習ができると考えた。それを達成するための手段として、プレゼンテーションソフトを使い、活動する場所、動きのポイント、活動の仕方などをスクリーンに映して提示した。ICT 機器を使い、視覚的な情報を提示することで、口頭での説明で理解できなかったり、児童や時間がかかったりする児童児童に対して、分かりやすく活動の場所や活動内容を示すことができた。また、1つのプレゼンテーションソフトのデータに単位時間ごとにページを追加していく形で作成していくことで、単元の学習の流れが児童はもちろん、指導する教師の中でも整理され、振り返りや次時の見通しをもって学習を進めることができた。(写真③)

また、ボールの重さが軽いものを使用し、運動の難易度を下げることや、ルールを工夫することで、すべての児童が楽しみながら取り組むことができた。初めはボールを使う運動に苦手意識をもっていた児童も、今回の振り返りでは、「こわかったけど、やってみると楽しかった」や「昼休みにまたキャッチバレーをやりたい」など、肯定的な感想も多く見られた。

児童同士の話し合いの場面では、話し合いの視点やポイントをあらかじめ提示し、論点がめあての達成に向かうよう工夫した。教師から児童への発問や声かけについては、児童が考えやすいよう幅をもたせるようにした。例えば、「作戦を考えてください」というのではなく、「どうすればボールを落とさずにできるだろう」と問いかけることで、児童自身が課題意識をもって学習に取り組むこと



【写真③】

(ICT を活用し、視覚的に活動を提示)



【写真④】

(作戦を考え、チームで話し合う様子)

ができるようにした。

研究授業後の事後研究会では、ICT機器の活用の際に正しい動きができていない児童の動画を見せ、自分の動きを改善することや、作戦を考える際に、めあてとのずれを解消するためのルールの設定や活動時間の工夫などが挙げられた。また、各学校で行っている取り組みやルールの工夫、チーム分けの仕方など情報共有を行い、経験の浅い先生の授業改善につながる場となった。

6 研究の成果と課題

(1) 成果

- 帯活動として、毎時間同じ活動を授業の導入部分で取り組ませることで、苦手な児童でも抵抗なく取り組むことができた。
- ICT機器により視覚的な情報を活用することで、活動が取り組みやすくなり、時間の確保にもつながった。
- 児童の実態に合った学習計画や場の設定、教材の選定を行うことで、児童が学習に自主的・主体的に参加し、運動に親しむことができた。
- 言語活動を工夫することで、話合いの質が高まったり、自分事として話合いに参加する児童が増えたりすることで、主体的に学習に取り組む姿が見られた。

(2) 課題

- 発達段階に応じた活動内容やゲームのルールを考えたり、中学年や高学年の中でも3年生と4年生、5年生と6年生のような隣接学年での目標を具体的に設定したりする必要がある。
- ICT機器の活用方法も多くあるため、実態や学習内容に応じて、選択していく必要がある。